■この世はあらゆる能力の人間を必要としてゐる

今の教育が良くないのは、その目指す学問がこのやうに低劣である事に由来します。小・中・高校では入試の為に勉強をしますが、大学に入ってしまへば忘れたやうに勉強しなくなります。大学に入るのは学問が目的ではなく、就職が目的だからです。また、その就職する目的も生き甲斐とする仕事に従事する事ではなくて、給料だけが目当てなのです。

「不義にして富み且貴きは、我においては浮雲の如し」とは孔子の言葉ですが、今の世は残念ながら富貴なる者の大方が不義を敢てしてそれを手に入れた者です。然し、その者とても、死に臨めば富貴が浮雲の如きものである事が解り、それを追ひ求めて来た自分の人生がいかに空しいものであったかを悟るに違ひありません。ですが、それでは遅過ぎますし、そのやうでは世の中がいつまで経っても良くならないのです。少年の間にこの事をよく理解させて置かなければいけないのです。それが、これからの教育の目指す学問でなければならない、と思ひます。

私は前に、教育とは「教へる」ことではなくて「自ら学び自ら習ふ」ことである、と述べました。私が小学校で学んだ時の国語の教科書に「三代の苦心」といふ文がありました。

「本居宣長の大著“古事記伝”は、契沖、賀茂真淵、宣長の３代に亘る研究の積み重ねの結果であった」といふものです。然し、宣長が師の真淵に会って直接教へを受けたのは、松坂におけるたった１夜の事でありました。あとは「自学自習」であの偉大な学問を大成させたのです。師との出会ひは、このやうにたった１夜でも火が点き、炎々と燃え盛るものである事が解ります。この本居宣長の事を思へば、「自ら学び自ら習ふ」志さへあるなら、世の中に本当の教師の乏しい事を嘆く必要はありません。

さて、この世にはいろいろな種類の職業があって、それでうまく成立ってゐます。ですからある種の職業は高い学力を必要とするけれども、ある種の職業は学力よりも別の能力を必要としてゐます。ですから、総ての生徒が高い学力を身に着ける必要など全く無いのです。所が、今の学校教育はそれを目指してゐて、学習に失敗した子供を「落ちこぼれ」と呼んでゐます。

世の中に「落ちこぼれ」など有るわけが無いのです。この世はあらゆる能力の人間を必要としてゐるからです。ですから、落ちこぼれが有るとしたら、それは学力の有無に関係無くて働く意欲の有無に在ります。それは学力主義の教育を廃めて、各人の能力に応じ、各人が好む事を存分にやれるやうに改めるだけで解決します。さうすれば誰もが、努力して仕事をする事の楽しさを知り、喜んで働くやうになるに違ひないからです。